

調査検証
コース



伏木エリア魅力発掘プロジェクト（灯台×癒し）

コンソーシアム名：岩崎ノ鼻灯台利活用プロジェクト実行委員会

対象灯台：岩崎ノ鼻灯台（富山県高岡市）

調査検証報告

岩崎ノ鼻灯台（富山県高岡市）

伏木エリア魅力発掘プロジェクト

コンソーシアム名

岩崎ノ鼻灯台利活用プロジェクト実行委員会

構成団体

伏木校下自治会連絡協議会、高岡市役所みなと振興課、高岡商工会議所、島田工業、伏木海陸運送、ヤマ自動車、富山テレビ放送

1.調査・検証概要

調査検証を構想した背景

【灯台のある伏木地区】

- ・伏木地区は古来、万葉の時代より港町として栄え、特に近世以降の北前船による交易により、現在の港町としての地勢が形成された。現在では特定重要港湾「伏木富山港」の一角として位置付けられており、富山県内における貿易拠点として重要なエリアである。
- ・一方、24年元日の能登半島地震で液状化被害などの大きな被害を受け、今も建物や道路の復旧工事が進められている。

【岩崎ノ鼻灯台について】

- ・前方に富山湾、右に立山連峰、左に能登半島という壮大な景色を見渡すことができ、万葉集を編纂した大伴家持が多くの和歌を詠んだ地である。
 - ・ただ、灯台周辺は雑木や竹藪が生い茂っているほか、道のりが細く急斜面であるため、車で近くまで行くのは困難である。
- 穴場だからこそそのメリットを生かし、観光資源としての活用策を模索したい。



2.調査検証の目標～明らかにしたい仮説

仮説のメインテーマ：灯台×癒しの事業で、灯台を訪れる人を増やす

岩崎ノ鼻灯台は、富山湾・立山連峰の大パノラマが広がる自然豊かな地にあるが、県民にはあまり知られていない穴場絶景スポットである。

また、灯台がある伏木エリアは復興に向かって歩みを進めている最中であり、明るい話題や癒しの時間が必要とされる。

地元の人たちはもちろん、伏木を訪れたことがない人たちにも灯台を核にして伏木の魅力を体感できるコンテンツを制作することで、「リラックスしたければ岩崎ノ鼻灯台に行く！」というイメージを付け、灯台を訪れる人を増やす。

survey 01

岩崎ノ鼻灯台の基礎調査

基礎データ、設置された経緯、関係者インタビュー（伏木海上保安部、地元の有識者）

survey 02

灯台の周辺状況と多面的な価値調査

- ・ 周辺環境データなどの収集、資料の収集やヒアリング
- ・ 灯台と周辺施設の整備状況（インフラやアクセスの状況）
- ・ 灯台周辺の地権者の登記簿謄本を取得し、地権者に雑木の伐採作業について説明し、認められたエリアで周辺の竹藪の伐採作業を行う。

survey 03

連携や事業化の可能性調査

関係者でのワークショップをイベントを組み立てる際に実施。
周辺企業も募り、灯台周辺が整備されたら今後どんな活用ができるか探る。

survey 04

パイロット版癒しイベントの実施

訪れた人がリラククス体験ができるイベントを企画。
参加者アンケートを実施し、参加目的やイベントとしての過不足などをヒアリングする。
※実験が成功すれば、2026年以降、定期開催を目指し、精緻なイベント構築を行い
料金設定・実施体制構築含め次のステップへと進めたい。

survey 05

実証を踏まえた来年度計画

イベント後の関係者ワークショップで来年度以降の計画を練る。
事業が社会や地域等に与える効果に関する予測をする。





いわさきのはなとうだい
岩崎ノ鼻灯台

**基礎
データ**



初点灯	1951年（昭和26年）5月30日
灯台の高さ	14.2m
灯りの高さ	平均水面より57.5m
灯質	単閃白光 毎15秒に1閃光
光達距離	20海里（約37km）
レンズ	光源LED回転型灯器
構造	コンクリート造
形状	白色円筒形鉄筋コンクリート造り
設計者	不明

設置された経緯



伏木港は古くから日本海側の重要港として発展し、明治初期には藤井能三の尽力で近代港として整備された。岩崎弥太郎が定期航路を条件に灯明台の設置を求めたことから、明治10年に伏木灯台が建設され、以後防波堤や突堤灯台が整備される。戦後の昭和26年には、港の復興と船舶の安全確保を目的に鉄筋コンクリート造の岩崎ノ鼻灯台が完成し、港町の発展と夢を象徴する航路標識として現在に至る。

関係者インタビュー（抜粋）



伏木校下自治会
連絡協議会
坂 廣志 会長

岩崎ノ鼻灯台は、私たちにとって町のシンボルであり誇りです。昔から港を守り、船を導いてきた灯台は、地域の発展の歴史と密接に結びついています。子どもたちや観光客にもその姿を見てもらうことで、伏木港の歴史や人々の努力を伝えることができ、大切な“生きた証人”だと思っています。



海上保安庁
伏木海上保安部
星野 宏和 次長

岩崎ノ鼻灯台は、単なる航路標識ではなく、伏木港の歴史と人々の夢を映す象徴です。明治期の港整備の流れや戦後の復興の努力を見守り続け、今も船を安全に導いています。高台に立つその姿からは、港町の発展と地域の誇りを感じられ、訪れる人々に時代を超えた物語を伝えてくれます。

岩崎ノ鼻灯台のストーリー

時を照らす港の光 -岩崎ノ鼻灯台の物語-

岩崎ノ鼻灯台は明治期に藤井能三が伏木港の
発展を願い建設した伏木灯台に始まり
戦後の昭和26年に鉄筋コンクリート造で完成しました。
港の復興と船舶の安全を守る役割を果たし、
地域の人々にとって町の誇りであり続けています。
高台から港を見守るその光は、明治から現代までの歴史、
人々の努力、そして未来への希望を象徴する
“時代の証人”です。



灯台に関する歴史的調査

郷土史「伏木港史」や新湊博物館での視察のほか、キーマンとなる元伏木高校教諭野口安嗣さんとタッグを組んで調査を行った。明治初期には藤井能三の尽力で近代港として整備されたことが分かった。



ガイドスクリプトの制作

岩崎ノ鼻灯台についてまとまった資料が少なく、郷土史の掲載も分散していたことから、誰でも説明できるガイドスクリプトを制作。クイズも入れ込み楽しく岩崎ノ鼻灯台と伏木のまちの歴史が学べるコンテンツが完成した。



オリジナルロゴ・グッズを制作

プロジェクトに親しみを持ってもらおうと伏木在住のデザイナーに岩崎ノ鼻灯台オリジナルのロゴを制作依頼。燈の守り人のキャラクターを使用したポストカードも制作し、配布した。



灯台周辺の景観・環境整備

地域住民が主体の伐採整備事業を実施。伐採エリアの地権者の特定や許可どり、今後も定期的な活動をするため備品を購入した。住民からは「今後も定期的に年1~2回は整備伐採をしたい」との意見が相次ぎ、恋する灯台の認定(2017年)以降、低下していた地元住民による灯台への関心を再び高めることができた。



シビックプライド(地域愛)を持つ住民の多さ

4年ぶりの灯台周辺の伐採事業には、経験者から若い世代まで18団体から市民ボランティアがのべ106人参加した。(初日55人、2日目51人)その後のミーティングも参加し続ける熱量が高い住民たちと繋がることができた。



「癒し」イベントの開催

整備された岩崎ノ鼻灯台をより多くの人に知ってもらおうと、五感を使って灯台を楽しんでもらう癒しツアーを開催。単なる見学にとどまらず、灯台をより身近で意味のある存在として捉えてもらうことに成功した。

課題

灯台周辺の環境・インフラ整備

- ・のべ100人を超える市民ボランティアの手によって灯台からの眺望を遮断する雑木を整備することはできたが、今後も竹藪や雑木が伸びることが想定される。
- ・伐採エリアの拡大や定期的な伐採整備を市民ボランティア主体で開催することが欠かせない。



施策

岩崎ノ鼻灯台 伐採整備の日を設け
市民主体のイベントに発展させる

- ・今年度手配した伐採器具を使用し、年に1~2回住民主体で整備をする日を設け、イベント化する。
- ・灯台周辺には温泉施設があるため民間企業と連携し、[地域の人が集まり⇒灯台周辺を整備⇒お風呂に入って地域愛を育む] ような行事が理想。

課題

メインで仕切る地域住民の高齢化

- ・今回、4年ぶりに灯台周辺の伐採事業を行うことから地元自治会を中心に経験者の参加を要請したが、60~80代が多かった。
- ・今後の定期的な活動を考えると50代までの若くて熱量のある団体や個人を巻き込む必要がある。



施策

地元の高校（伏木高校）との連携
親世代（40~50代）の巻き込み

- ・野口先生は元伏木高校の教諭で今も高校で郷土史に関するフィールドワークを引き受けている。観光スポットでガイド経験のあるボランティア部に灯台の魅力発信を協業依頼。
- ・親世代の地元住民を巻き込む仕組みづくりを整える。

課題

桜の灯台として有名だが…
春以外の季節の魅力発信不足

- ・伏木海上保安部は桜が満開になる4月に一般開放を実施しているが、通年で灯台を訪れる人を増やすためには春以外の季節の魅力の発信、仕掛けが必要。



施策

季節ごとに灯台の魅力を感じられる動画を制作
燈の守り人のキャラクター・声優さんも活用

- ・地元住民からヒアリングした、灯台を訪れるおすすめの時間帯やフォトスポット情報を集約し、「燈の守り人」のキャラクターとその声優を起用したPR動画を制作する。

課題

灯台、灯台の敷地内の使用に制限がある

- ・今年度は伏木海上保安部星野次長を中心に灯台の使用に関して力を貸していただいたが、許諾を得るまでの日程や準備に時間がかかり、使用に制限があった。



施策

「航路標識協力団体」への登録を進める

- 住民主体の灯台利活用を進めていくために航路標識協力団体の申請を検討している。
- どんな利用を進めていくのか精査し、可能であればお金を生み出す仕組みもあわせて活動内容を協議する。



- 10/12 サンデーNews 11/6 ライブBBT 富山テレビ放送
- 11/3 富山新聞
- 11/16 北日本新聞
- 港湾新聞媒体(うみそらみなと・港湾TV)1月号 掲載予定

4種のリリース・レポートを配信

のべ111媒体

調査検証をふまえた 今後の展開案

事業背景1

◆ ポテンシャル

- ◆ 地元団体・企業が協力的。また、地域愛（シビックプライド）を持つ人が多く、灯台周辺を盛り上げたいと考えているアツい人たちと巡り合うことができた。
- ◆ 伏木富山港に入港する船舶が最初に目印とする灯台としても重要な役割を果たしている。伏木富山港は本州ほぼ中央に位置し、恵まれた地理条件から日本海側の要港として古くから栄えてきた。
- ◆ 灯台までの道のりは急カーブで車での対面通行は難しいが、駐車場や周辺の整備をすれば訪れるハードルが下がる可能性がある。

事業背景2

💡 私たちが取り組む理由とねらい

- 💡 能登半島地震の復興は道半ばであるが、今だからこそ「伏木」のまちな魅力を発信する時期であると考えます。
- 💡 地元の高校生とタッグを組んで灯台や伏木の歴史が分かる教育コンテンツプログラムを開発。燈の守り人キャラクター・声優さんにも協力を依頼。
- 💡 回遊性の向上のため灯台周辺の観光拠点（雨晴海岸、国宝 勝興寺など）をめぐる仕組みをつくり、地域全体で活性化を図る。

事業概要

事業名 伏木エリア 魅力の灯(あかり)プロジェクト(仮)

- ・今年度調査して「発掘」したポテンシャルを生かして魅力を「発信」する事業に。
- ・教育の分野に力を入れ、文化や思いを次の世代につなぐ教育コンテンツプログラムを制作。
- ・灯台周辺の観光拠点（雨晴海岸、国宝 勝興寺）と連携した観光ソリューション



地元の高校生とタッグを組む



燈の守り人キャラクター・声優さんの活用



周辺観光拠点とのコラボレーション



定期的な灯台周辺の整備

事業名：伏木エリア 魅力の灯(あかり)プロジェクト



熱源となる人たち (核となる主体者)

富山県立伏木高校 元教諭 野口先生

高岡市伏木地区にある県立高校。
野口先生は伏木地区歴史探訪の授業を担う。
生徒会やボランティア部を中心に伴走を依頼。

伏木校下自治会連絡協議会

伏木地区にある自治会・団体・企業との
強固なネットワークがあるため
広報や企画運営を協業。

伏木駅前の飲食店経営など まちづくりを支える地元企業

オリジナルの弁当の開発や
移動手段（トゥクトゥク）の貸出。



熱源を支える人たち (その他の主体者)

地元住民・企業など

定期的な灯台周辺の整備を主体として行う。

高岡市みなと振興課

灯台周辺の振興を核とした企画の立案。

全国にいる灯台ファン

周辺整備を行いより美しくなった
岩崎ノ鼻灯台の
魅力を発信してもらおう。



協力者

伏木海上保安部

灯台や周辺土地の使用に関する許諾。
「航路標識協力団体」への登録も並行して行う。

株式会社ワールドエッグス

燈の守り人キャラクターを使用。

事業名：伏木エリア 魅力の灯(あかり)プロジェクト

新たな灯台利活用モデル事業が定義する「自走化4分類」のうち、本事業は以下を目指します

本事業が 目指す型	分類	自走化の方法	中心となる事業者
	I ビジネス型	灯台および付属施設等をホテルなどに利活用する、 または 灯台および周辺地域の魅力をコンテンツとして利活用することで、 <u>ビジネスとしての収益化を達成し、自走する。</u>	民間事業者
✓	II 非営利 収支均衡型	灯台及び周辺施設等を活用し、 イベント開催や観光ガイド等を組織しながら、主として、 <u>収支均衡となるような小規模の地域活性化事業を行い、 非営利団体として、自走する。</u>	非営利任意団体、 NPO等
	III 自治体 補助金型	自治体が主体となり、 新たに地域課題や観光資源の一つとして 灯台及び周辺施設等を位置づけることにより、 <u>自治体の予算やリソースが投入され、自走する。</u>	自治体
✓	IV お祭り協賛型	灯台に係るイベントを開催することで、 灯台を含むエリアの新たな価値と集客・PR効果を創造し、 <u>地元自治体や地域企業からの協賛金や、出店料、 参加者から入場料などの イベント収益によって、自走する。</u>	イベント事業者、 放送局

調査検証資料

①岩崎ノ鼻灯台の歴史調査

岩崎ノ鼻灯台は伏木港とともに歩んだ日本の近代化と復興の象徴

1

明治期：港の近代化

藤井能三の尽力により、伏木港の近代化が進展。三菱商会汽船の寄港を契機に、灯台・測候所など航路安全施設を整備し、日本と世界を結ぶ拠点港として位置付けられた。

2

湾港としての発展

特別輸出港・開場港に指定され、国際港として機能を拡大。河口港として灯台・ブイ整備が進み、物流・航行の要として重要な役割を果たすようになった。

3

昭和26年：灯台建設

戦災後の復興構想「大高岡論」を背景に、岩崎ノ鼻灯台を建設。鉄筋コンクリート造・常駐型の最新鋭灯台として、復興の象徴となった。

4

現在：継続する使命

現在も伏木港を見守り続け、LED灯器導入など最新技術による機能更新を継続。歴史と革新が融合した航路安全の守り手として、伏木を照らし続けている。



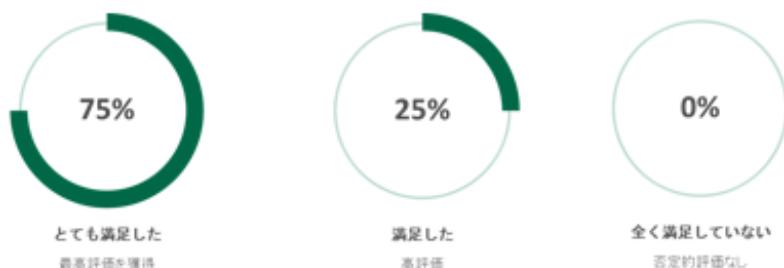
②癒しイベントのアンケート調査まとめ

アンケート結果から見る効果と今後の可能性

ツアーの満足度を測定し、灯台に対する参加者の意識変化を把握することで、今後の活用可能性を探りました。

- ・ 調査対象：ツアー参加者
- ・ 有効回答数：4名
- ・ 調査項目：満足度、関心変化、活用可能性

ツアー全体の満足度



ツアー全体として高い満足度を得ており、コンセプトや体験設計が参加者の期待に十分応えられていたと評価できる。

灯台への関心・親しみの変化



参加者全員にポジティブな意識変化がみられました。灯台を「知る・見る」だけの観光対象から「身近に感じられる」場へと変化したと評価できる。

今後の活用可能性・まとめ

「地域のおまつり」「桜の時期に訪れたい」「未来への道導」「眺望がよいので皆さんに共有したい」などの意見が寄せられた。本ツアーを通じ満足度、関心醸成の両面での効果が確認され、灯台を地域に開かれた資源として活用する可能性が示唆された。

③岩崎ノ鼻灯台イメージ写真、動画

